

『出水喜多会の活動について』

白男川 孝仁



その1『地方創生』について

令和7年の参議院議員選挙の最中の寄稿であるが、争点のひとつとなった『地方創生』について拙い話をした。

選挙戦での『地方創生』については、地方での事業収入の可能性について多くを語られていたようだが、本来、収入利益の面ではなく日本の伝統芸能文化事業に大いに目を向けて頂きたいものだと、考えている。

かつて入来で開催されていた『薪能』など、その最たるものである。

筆者は、梶原宣俊師かじわらのふとしの誘いを頂き炉ばたセイ談4年目の新参者であるが、梶原師の能・謡曲二十五年についてご紹介しよう。

令和7年で、師は七九歳とられるが、昨年来体調を崩され、炉ばたセイ談の寄稿をはじめ、出水市文化協会の理事や、鹿児島謡曲連合会の幹事まで、公的なお役目をご辞退され、自宅で静養されている。

能楽との出会いは、五十一歳の時能楽堂のある福山市で、喜多流能楽師大島政允氏まさみづに師事された事に始まるが、たった6年で『喜多流謡教士免状』を取得された。

熊本県芦北町で毎年『喜多流薪能』が開催され我々弟子達も連れて行って頂くが、現在は大島政允氏の長男輝久氏てるひさや衣恵様きぬえはTVでも御活躍中であらう。

その2『鹿児島謡曲連合大会』での活躍

鹿児島謡曲連合会の会報『風姿』第2号に

喜多流・出水喜多会（梶原宣俊）の幹事活動の記述が見られ、翌年の第56回鹿児島謡曲連合大会に、梶原師の鬼界嶋『独吟』と記載がある。平成19年のことである。

また、平成27年の『第30回国民文化祭』の『能楽の祭典』にも、梶原師と國安兄弟子の『簾』、『敦盛』の記録が見える。

実は、筆者は俳句活動がもとで梶原師と出会うことになるのだが、それまでは『俳句』も『能』も全く無縁の生活であった。

出水市教育委員会の方々が、『第30回国民文化祭』のポスターを持参して、『出水市が俳句大会の会場に決まったのでご協力下さい。』とのことであった。

俳句など作ったことはなかったが、出水市の吟行バスで鶴の観察センターなど見学して俳句大会へ初投句も試みた。

予想通りの残念な結果であったが、入選し

た高校の同級生から、『俳句会』なるものに誘われた事が大いに幸いであった。

出水市の『夕鶴俳句会』は、毎月一回第三水曜日に中央図書館で開催されているが、鹿児島から御指導に見える俳句結社『河鹿^{かじか}』の^{かわむきまわ}淵脇護主宰の教えが素晴らしく、その後楽しい勉強に明け暮れる日々が続くこととなる。

数年後、俳句会の学級長になると出水市文化協会の委員としてお役目を頂き、新年会で『能楽の謡い』という聞いた事もない分野で活躍の梶原宣俊氏との出会いがあった。

そして、翌年から『夕鶴俳句会』にご加入頂き、その後筆者も『能楽の謡い』を勉強させて頂く運びとなった。

その3 入来院家の活動について

梶原師の凄いところは、鹿児島謡曲連合会第5号会報『風姿』にご紹介のあった『入来院能』に強い興味を持たれ、入来院貞子様と

は御会い出来なかったが、鹿児島謡曲連合会・前会長の中西喜彦先生が編集長をされている『炉ばたセイ談』に長年寄稿をされ続けていた事である。

『風姿』第5号は、平成21年10月30日の発行であるが、第一面全面で『第7回入来薪能』の御解説を入来院貞子様がなさっている。では是非とも写真掲載をお願いして皆様にご覧になって頂きたい。(別添)

また平成26年の『風姿』第10号には、現在『炉ばたセイ談』編集担当の下土橋渡氏の御寄稿が記載されているので紹介しておく。

『入来薪能と鳥追舟』

下土橋 渡

夫で庶流入来院当主の入来院重朝氏の定年退職に伴い、平成6年夫と共に東京から薩摩川内市入来に移り住んだ入来院貞子さん

(平成23年5月死去)が、先祖の渋谷氏が関東から下向して750年になるのを機に、地域興しグループとその支援会の人たちと、東京から観世鍔仙会一行を招き入来薪能を開催したのは平成12年のことでした。

地域興しグループも支援会グループも能にはずぶの素人でしたが、第1回の薪能を皮切りに第2回、第3回と成功させていきました。

第4回を開催することになった頃、貞子さんは地元の薩摩川内が舞台になっている『鳥追舟』という謡曲があることを知ります。ぜひやりたいと思いますが、経費負担が限界ぎりぎりのところになっていました。

しかし『鳥追舟』の開催を決心。場所も市街地のサンアリーナせんだいに移し、平成14年9月7日、入来薪能『鳥追舟』が実現します。

貞子さんのエッセイに次のようにあります。—今までの曲よりワキツレと子方の2名が増えるばかりでなく、ワキも上級な人でなければならぬということ、京都の先生をお願いする。ハタラクというお手伝いも1人増え費用は相当かかるのだが、後々にも川内市の記録に残ることを考えれば、ここは頑張るしか仕方がない。

貞子さんが亡くなった今、『鳥追舟』の開催は後々に残る貴重な記録になっています。

入来薪能『鳥追舟』の開催が契機の一つになり平成16年に、九州新幹線川内駅前に、能『鳥追舟』の里の碑が建立されました。

(元九州職業能力開発大学校教授)

その4最後に

現在の出水喜多会は、筆者と高校3年生の山下凛さんの2名で活動している。



出水喜多会（左より筆者、梶原宣俊師、山下凛さん）

令和二年に、文化庁支援の伝統文化親子教室が出水市で始まり、翌年山下凜さんが中学三年生で弟子入りして下さった。

梶原師の体調が思わしくない中で毎月2回の勉強会を続けて頂いている。

勉強熱心な山下凜さんは女生徒ながら強吟が得意で、堂々たる謡いっぷりに梶原師も目を細めていらつしやる。

今年の10月の鹿児島謡曲連合大会では、二人で『舟弁慶』と『安宅』^{あたか}を発表の予定であるが、大学進学を控えている山下凜さんの今後を御心配下さっている梶原師に対し、『大学生になっても続けますので、先生！お元気になって沢山の謡いを教えて下さい！』と胸が熱くなる事を言ってくれる。

体調ご不調ながらも出水喜多会の活動継続を切望していらつしやる梶原宣俊師の御快復を願いながら、師の期待に応えたい。

しらおがわ・たかひと

出水市文化協会 副会長
俳句結社河鹿 無監査同人



別添

風姿

第5号

10月30日
発行

鹿児島謡曲連合会

事務局

〒891-0112 鹿児島市魚見町155-10

電話・FAX: 099-268-7341

E-メール: nakanisi@po.synapse.ne.jp



かがり火に照らされ能「巴」の幽玄な世界 (写真撮影・下土橋渡氏)

5年ぶり山城に幽玄美

第7回入来薪能——入来院 貞子氏



宵闇の迫った中世の山城を背にした能舞台の静寂をかな笛の音が、そして裂帛の鼓が貫く。篝火の炎が風に揺れて、荘厳な舞台を照らす。

漂とした舞台に「巴」とワキが登場して修羅物の巴の舞が始まる。

この清色城址で行われる入来薪能は7回を迎えた。平成10年の「渋谷氏下向750年イベント」の成功に続く町おこしを模索していたその年の秋、在京中に私たち夫婦がご自宅に伺って謡曲を指導して

いただいたいた鏡仙会の若松健史先生が、長崎の諏訪神社で諏訪を舞うとお聞きした。私はこれだと思った。そして「先生、長崎までいらつしゃるなら鹿児島にもいらしてください」と頼み込んだのが始まりだった。

忙しい日程を縫ってご来鹿いただき、この清色城址を案内して会場にどうだろうか」と伺った。そして先生から「ここは最高の舞台になる」と折紙をつけていただいた。

実行に踏み切ろうにも、実際の作業に当たる土地の者は誰一人能を観たこともない。百聞は一見にしかずと、岡山の上最上稲荷で薪能をなさる先生の舞台を観ることにした。ワゴン車に町の企画課長と職員、大工さん、照明音響担当者と一緒に花水木会計の6人で早朝出発。1泊の見学を

強行した。そして舞台や照明など、実行に必要な知識を得て第一歩が踏み出せたのだ。

第1回は「天鼓」。第2回に「巴」を予定していたが雨で中止。それから「清経」「鳥追」「屋島」「忠度」と基本的に毎年続けてきた。

しかし、個人的に赤字を補うには限界が来ていることと、私が発がんしたため5年間の空白となっていました。今回、再開できたことは本当に幸なことだと思ふ。

ご来場の方々には異口同音に「素晴らしい」「感激した」と言われる。実際にご覧になれば、日本の伝統芸能の持つ芸術性に打たれるのだ。そして私はその意義をかみしめる。ただ赤字は入場者数に反比例するので今年も結構な額を背負う羽目になってしまった。

この入来薪能が赤字に悩まされることなく大らかに企画できるような仕組みができないものだろうか。この地の行事として、より多くの方々に感動を与え続けることができるようになることを切望している。